

安田老山の生涯と芸術

村田 隆志 (大阪国際大学)

安田老山(1830~83)は日本近代美術史上、特筆すべき画家である。日本近世・近代美術史研究の古典ともいべき藤岡作太郎『近世絵画史』(1903年)が、明治初期に南画が大流行したことを伝え、「老山の名天下に遍く、就いて学びまた画を請ふものその門に満つ」と記していることは象徴的であると言えよう。しかしながら、老山についての研究はほとんど蓄積されておらず、生涯・芸術を通覧し得るような回顧展は没後一度も開かれていない。このために、老山の生涯や芸術については前半生を中心として、詳細が不明な部分が極めて多い。美術史の研究者は安田老山について、明治以来の長期間にわたって必ずしも積極的な研究を試みてこなかったと言えよう。

しかし、老山の活動についてはむしろ美術史以外の研究者によって一定の注意が払われつつある。老山は幕末に上海を始めて訪れ、一度日本に帰ってから、紅楓(1846~72)と号して画を能くした妻を伴って再度上海を訪れていた。当時の上海において日本人画家が夫婦で活動し、胡公寿や馮耕三ら当時の文人たちと積極的な交流を持っていたことに加え、紅楓の客死後に老山が台湾を訪れていたことなどの特異な活動から、老山については、近代日中文化交流史や上海史研究の観点から各種の論文において言及されることが少なくないのである。本発表の目的は、このような状況を踏まえた上で、老山の生涯と芸術について明らかにするところにある。

老山の生涯を知る上で最も重要なのは、青山霊園に現存する「老山翁之墓表」である。本墓表は老山の生前に親しく交友した巖谷一六の撰文、日下部鳴鶴の揮毫によるものであり、資料的価値は極めて高いが、その内容が美術史や隣接諸分野の研究において従来深く検討されて来たとは言えない。このため、本発表においては、基本的に本墓表の記述を追いながら、日中の資料を援用しつつ、老山の出身、学画の状況、紅楓との結婚、上海・台湾での活動、明治天皇行幸時の御前揮毫に代表される帰国後の活躍などのそれぞれについて考察を深めたい。また、現時点で調査を行い得た実際の作品の検討についても合わせて行うこととする。

淡墨側筆によって構成される老山の特徴的な画風は、明治初期には上述のように一世を風靡した。しかし、その人気に便乗した模倣作家による芸術的創造性に乏しい南画作品の氾濫は、アーネスト・フェノロサの指弾や、マスコミからの批判を招き、以降南画は衰微していく事となった。老山の没後にはこのような傾向は一段と強まり、近代の日本画は老山のような作風から意識的に遠ざかるような傾向を見せつつ発展することになっていく。つまり、老山を考えることは、日本近代美術史の原点を考えることでもある。従来等閑視されてきた安田老山という画家の存在が、後世に与えた様々な影響についても言及したい。